

理事長就任のご挨拶

理事長 安川 信一郎

この度、社会福祉法人多摩福祉会の理事長に就任した安川信一郎です。

6月24日の評議員会および理事会の議を経て理事長に就任いたしました。本来なら、皆さまに直にご挨拶すべきところですが、書面にて失礼いたします。

垣内前理事長からは経営会議をはじめ、職員が主体的に運営参加するなど民主的な法人運営のあり方について多くのことを学びました。

垣内前理事長の後任という重圧の中で日々を過ごしていますが、理事、監事、評議員、職員のみなさんの力を借りながら法人の理念実現のために努力していきたいと思っております。私は養護学校の教諭になりたいと思いい大学に入学しました。サークル

活動とアルバイトが中心の生活だったためか、卒業を前にしてことごとく採用試験に落ちてしまいました。

これからどうしようかと悩んでいた時に、ゼミの教授が東京にある多摩福祉会を紹介してくださいました。

サークルで子どもたちと接するなかで漠然と子どもにかかわる仕事がしたいとの思いがあったため、無資格でしたが、多摩福祉会で働くことになりました。

1977年4月に多摩福祉会に入職してから46年になります。半世紀近くになると思うと良く続いたものだと改めて思います。

今でこそ、「子どもの気持ちを大事にしよう」「子どもがそうするのには理由があるんだよ」

などと職員には話していますが、就職した当時の私は、子どもの気持ちを理解しようとせずに自分の思いを子どもたちに求める保育士でした。

連絡先

〒155-0031
東京都世田谷区北沢 2-36-9-4F
社会福祉法人多摩福祉会
法人事務局
◆Tel. 03-6804-8345
◆Fax. 03-6804-8347
tamafukushikai@gmail.com

今号の目次

- 1p 理事長就任のご挨拶
- 2p 理事退任にあたって
- 3p 退職者の会のつどい
- 4p 貝取小放課後子ども教室
スタート
- 5p 【連載】夏休みを越えて
- 6・7p 中堅層研修委員会座談会
- 8p しろくま保育園ができるまで

「たまたふく」のご感想をお聞かせください。



きもちつながる、想いひろげる。

こぐま保育園の職員、父母、子どもたちに支えられて今があるような気がします。

保育士としては10年ほどの現場経験しかなく、その後はこぐま保育園の幼児主任を経て園長となりました。その当時は年齢別保育から異年齢保育への移行の時期で、現在の園舎建て替えにもかかわることができました。

その後、練馬区の公立保育園の民間委託に伴い向山保育園に園長として異動することになりました。向山保育園で6年、砧保育園で4年（副園長1年）、新設の上北沢こぐま保育園で3年、最後の園長職が、以前園長をしていた向山保育園でした。自分が必要とされている、誰かがやらなければいけないという気持ちで46年間やってきました。学童を除く法人すべての施設で園長をすることができました。大変な

こともありましたが新しい環境に自分の身をおくことで、常に新たな出会いがあり、自分自身が成長できたと思っています。

自分自身の課題でもあるのですが、広い視野に立ち客観的に物事を判断するためには、学習はもちろんですが、時間と体調と心の余裕が大事です。時々各施設に出向き子どもたちからエネルギーをたくさんもらいたいと思います。

今年度から法人は、練馬区での新園の開設、放課後子ども教室等様々な事業に取り組んでいます。理事長一人でどうにかなるものではありません。法人職員みなさんの知恵と力を結集して、多摩福祉会らしい法人運営をおこなっていききたいと思っております。

今後ともよろしくご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

理事退任にあたって

佐藤 正



6月末をもちまして2年間の任期満了を迎え、理事職を退任いたしました。振り返りますれば2014年より9年間務めてきました。私が役職を全うできたのは、ひとえに任期毎の評議員会・理事会、経営会議の皆様からのやさしい気遣いや、さりげない配慮をいただきながら、親切丁寧にサポートしていただけたことであつたと実感しております。

2人の子どもの親としてこぐま保育園との出会いから当法人との長いお付き合いになりました。父親として、父母会役員として、そして法人役員として、困難や悩みに突き当たったとき、常に私の心の支えとなったのは児童憲章でした。読み上げる毎に、心が整理され涙と勇気と希望が湧いてきたのです。

多摩福祉会への関わり方は様々でしたが、長き月日の中で涙もろくなつた所以は、色んな物事の気持ちがるようになってきたからでしょうか。私は人間としての成長と捉えてその過程を振り

返れば、社会福祉事業に高い識見をもち社会の動きに敏感で、常に変化する社会のニーズや組織の能力に応じて柔軟性を発揮してきた垣内前理事長の存在でした。営利化と私物化の対極にある公益法人として、透明性の高い民主的な経営を求め続けて欲しいと垣内前理事長は常々発してきました。私は、“多摩福祉会にはオーナーは居ない”、“多摩福祉会はみんなのものです。社会の財産です。困難に遭遇し立ち止まる時もあるでしょうが、この法人が頑張らなければ、幸せからこぼれてしまう子どもやご家族がいることを忘れてはなりません”（「理事長離任のご挨拶」）と、優しく語りかける言葉の真髄・法人事業への熱意に諭されてきたからです。

多摩福祉会のロゴマークに“きもちつながる、思いひろげる”が掲げられているように、人と人の思いによって結びつく経営体であり、公正を保つ民主的な管理運営ができる社会福祉法人足り得る存在になろうと微力ながら今日まで務めてきたとも思えるのです。

9年間役員として最も苦楽を共にしていただいたのは学童保育施設長・職員の皆様でした。共に切磋琢磨させていただきました。何よりも嬉しかったことは、職員の皆様方に誠実に向き合いながら、投げかけた様々なことに真摯に耳を傾けて下さり目標を成し遂げ、共に成長することができたことです。子どもたちにより豊かな生活のための積極的な事業提案や実践は、学童保育職員の日

頃の勤勉さ、意欲、集中力による協同の現れだと強く感じてきました。いま多摩市内4施設の学童保育事業はグループ担当制を柱に、子どもが安心して過ごせる生活の場として相応しい環境創りに挑戦中です。多摩福祉会らしい保育実践の実りに期待しています。

語り出せば語り尽くせない想いに駆られます。“法人だより”をお読みの皆様にご1つをお願いをして結びと致します。

昨年発刊した法人50年誌を次の50年に向けての架として読み続けていたきたい。多摩福祉会のミッション・夢の実現に創造力豊かに未来に花開かせることを心から願っています。

最後に、6月24日の評議員会により立場は変わり、当法人の監事として法人の業務監督を担うことになりました。この職務を適切に行なうために引き続きお世話になりますが、何とぞよろしくお願い申し上げます。

多摩福祉会役員

(2023年6月24日～)

理事長	安川 信一郎
常務理事	西田 健太
理事	垣内 国光
理事	玉田 和良
理事	田川 英信
理事	中村 真理子
監事	柿田 雅子
監事	持田 晶子
監事	佐藤 正

退職者の会のつどい

つどい世話人 吉野 智子



「こぐま保育園退職者の会のつどい」を5月21日に開催しました。退職者の会は、2000年の園舎改築を機会に地域の方と共に交流の場を持つ、保育園を見守り応援していく会として自主的に結成されました。今回こぐま創立50周年を祝う会を園と共に開きたいと考えましたがコロナ禍で難しく、まずは退職者で集まることにしました。当日は34名、長崎・山形・千葉・埼玉・神奈川などからも参加されました。

つどいでは在職中の自分の仕事への誇り、パート・常勤に関わらず共に保育や組合活動を創ってきたことへの思い、退職後も保育に、子ども食堂・ボランティア・婦人団体や社会活動を続けているなど自分らしく過ごしていることが語られ励まされました。また「再会で嬉しかった」「伊藤先生の挨拶はこぐま保育園と法人の50年を振りかえりつつ今考えなくてはならないこともわかり勉強になった」「保育園の状況が高橋園長の話でよくわかった」の声も。

欠席の方からは「Uターン29年になります。こぐま保育園で学んだ『働くこと』『子育て』『仲間』は色あせるどころか未だに私を支え続けてく

れています。こぐまを心の相棒にして頑張っています」「浦辺先生の教えをいつも受けとめてその後の保母生活を歩むことができました」などが寄せられました。

私もこぐま保育園で共同保育の理念、子どもを第一に考え保育の充実のため職員と父母が共に力を合わせる大切さを学びました。社会に目を向け、現状の制度の不足を共同の力で変えていくことをあきらめないことも。「あなたはどうしたいの？」と保育討議でよく問われました。自分の弱さや未熟さもありませんがどうしたらより良い保育ができるか、子どもにとって一番いいことってなんだろうとみんなでもよく学習しました。話し合いと学びを基礎に各々の主体性を発揮することで保育を創造し、子ども・職員・父母とのつながりの中で成長できたように思います。

時代は変化していますが、保育者・父母が共に子どもの成長を喜び、大変さを語り合うことは変わらず大切だと思います。語り合ってお互いを理解し手をつなぐことに、困難と思う中にも解決の糸口を見つけ「保育って楽しい」「子育てって楽しい」と思えるのではないかと希望を感じます。

現在、退職者の会の仲間が子育て・福祉センターの活動（ティールラウンジや浦辺記念・近現代史を学ぶ会）や遊ぼう会のお手伝いを続けています。コロナ前には子ども達と一緒に芋饅頭作りやしめ縄作りもしました。子どもにとっていろいろな世代の人とふれあうことは多様な人間関係

を経験するチャンスです。

今後も世代間交流などに参加させていただいて、保育に頑張る職員・子育てに奮闘する父母の皆さんを応援していきたいと願っています。



貝取小放課後子ども教室スタート！

教室長 今野若葉

2023年10月より多摩市立貝取小学校にて新しい放課後子ども教室が始まりました。放課後を安全に楽しく過ごせる子ども居場所づくりを目的として行政、地域、学校が連携して行っています。今までは月に一度PTAの方を中心に行っていました。10月からは多摩市の委託を受け、多摩福祉会が運営することになりました。開催日時も増え、週5日（給食のある平日）となり、対象は貝取小学校に通う1～6年生の全児童です。学校の授業が終了したら、自宅へ戻らずランドセルを持ったまま、放課後子ども教室へ参加することができ。この放課後子ども教室に参加するには保護者の方による登録が必要となりますが、一度登録をしていただくと、一年間（年度ごと）申し込みの必要あり）自由に利用することができ。また基本的に費用はかかりませんので、全員の方に登録をお勧めしています。

貝取小学校の放課後子ども教室では、子どもたちは学校内にある放課後子ども教室専用の教室で受付を済ませ、各自ホールや校庭、体育館など好きな場所へ行って自由な放課後を過ごします。『自分で一日のスケジュールを管理する』という点が学童クラブとは大きく違い、帰る時間や過ごし方について基本的に職員からの声掛けはありません。その日の流れが決まっているわけでは無

いため、自分で組み立て、管理することが必要となってきました。しかし、時間が決まっていな分、自由に過ごすことができるというメリットがあります。友だちと校庭でサッカーをして過ごす日、一人で集中して勉強をする日、流行りの漫画に熱中する日、体育館でみんなとバスケットボールをする日。子どもたち一人ひとりがその日の“やりたい”を職員の見守りがある安心できる環境で叶えられる場所こそが、放課後子ども教室です。また放課後子ども教室では様々なプログラム



あたたかな木のぬくもりとポップな色合いを組み合わせ、居心地の良い空間を目指しました

を用意しています。専門人材を活用した活動プログラムでは和太鼓やブラインドサッカーなどなかなかできない特別な体験を準備し、地域のボランティアの方から囲碁や和本作りなどを教えてもらえる機会を設ける予定です。そして同じ敷地内にある学童クラブとも連携し、様々な行事を共催で行います。学童クラブに通っていない子、既に卒クラブした子どもとも交流できる機会となり、放課後子ども教室という場所を通じて、子どもたちの輪の拡大を目指します。

放課後子ども教室という場所が、子どもたちにとって安全で自由な新たな放課後の居場所になれるよう、気軽にフラッと立ち寄れる居心地の良い空間を目指して運営していきたいと思ひます。

「たまふく19号」の発行が大変遅くなりまして申し訳ございませんでした。



- 広報委員会 ●
- 中本 琢也
- 江藤 龍之介
- 平田 桃子
- 岡田 織

「たまふく」のご感想 ご意見をお寄せください。どんなことでも構いません😊

こちらのQRコードもしくは



tamafukushikai@gmail.com まで。

お待ちしております！



私の小学生の頃の夏休みと言えば、虫取りや野球やサッカーをしたり、水風船や水鉄砲を持って走り回ったり、友達の家でゲームをしたりしていました。高学年になるとプールや多摩川で遊んだのを覚えています。その合間に父の実家がある佐賀の伊万里に泊まりに行き、兄たちとザリガニ釣りをしたり、花火をしたり、海に行ったりして過ごしました。夏休みの7〜8割は友達と遊んでいたと思います。皆さんが小学生の頃はどうかごしてましたか？

さて最近の小学生の夏休みは、時代の流れと共に変わってきています。習い事も様々、連絡網は各学校で廃止され、家電話がない家庭も増えてきたため、友達との遊ぶ約束は今や親を介してです。また熱中症や光化学スモッグの影響で外に出られないこともあり。ではどう過ごしているのかというと、自宅でオンライン通信をしながら友達とゲームをしたり、動画配信サイトを観たりして過ごす事が多いようです。

こうして人との関わりが簡略化されて顔を合わせずに過ごせる時代の中で、学童クラブの子どもたちは、夏休みの朝8時から17時まで（多摩市の場合は19時まで）の長い時間を学童クラブで過ごします。夏休み中盤は家庭の都合で数日休む子どもたちが多いため、普段はあまり関わらない子と遊ぶ機会が増えます。そのためお互いの事が分からずもめる事もあります。いつもならうまくいかない時は距離を取ること



新連載～第2回～（全4回） 夏休みを越えて



もできるのですが、在籍人数の半数ほどしか出席していない日になるとそうもいきません。集団の中でうまく距離感を掴んだり、上手にコミュニケーションをとったりしないと一人になつてしまいます。もちろんその状況で一人でも大丈夫な子もいれば、とにかく誰かと何かしたいという子もいます。一人で過ごす事は決して悪くありません。むしろ大切な事だと思えます。

しかし、本当はなりたくないのに一人になつてしまう事もあります。そうなるという子の傾向としては、うまく気持ちが言葉にできなかったり、気付かずに他人を傷つけてしまったりする事があります。周りの環境も重要です。消極的な子には「気付いて声をかけてくれる人」がいるか、乱暴な子には、それを「やめて！」「だめ！」と言ってくれる人がいるかが、大きく影響しています。そして相手も「なんか嫌だ」の『なんか』をよく振り返らないまま「嫌な事をするやつ」と置き換えてしまう子も多

いように思います。現代の子どもたちはみんな自分の事でいっぱいなのでしょう。私たちはそのような子どもも集団を見て「好きで一人になつているのか」「うまく入れなくて一人になつているのか」、周りがどういう環境なのかを見極め、一人一人フォロワーの仕方を考えてうまくやりとりできるように話し合いの仲介役をする必要があります。

また、いつもと違う活動の企画もします。

施設によってさまざまですが、水遊び、スイカ割り、おまつり、映画会のほか、トイレットペーパーで吊るしたおやつを水鉄砲で撃ち落としたり、ペットボトルでスライダーを作ったり、傘袋に水を入れて水風船のように遊んだり。甲子園のテレビ観戦をした事もありました。子どもたちが楽しめるには何をしようか、職員は日々考えながら子どもたちに提案しています。時には、子ども以上に大人が楽しんでいて、職員同士で「なにやってんの？」と笑ってしまうこともあります。

このように様々な活動を通して人との関わり方を学び・深め合っているのが、夏の学童クラブです。夏休みが明けるとまた学校が始まり、通常の学童クラブに戻ります。それぞれの夏の経験が学校・家庭、またその子自身の何かに還元されるといいなと思います。秋から冬の学童クラブでは、おみせやさんや遠足などの行事が行われます。この夏の経験がそれらの行事でも活かされていきます。

さて夏休みも終わり、学童クラブの午前中は一気に静かになりました。今日も職員は午後後の受け入れに向けて準備をしています。

筆者：中村 輝（なかむら あきら）

2011年貝取学童クラブ入職、その後コロナ禍での施設長3年間を経験。現在は3児（小2女子、年中男子、1歳女子）のパパ。保育士の妻が4月に育休復帰した事もあり家庭都合で施設長退任。毎日仕事・育児・家事に絶賛奮闘中！

中堅層研修委員座談会

聞き手 中本 琢也（向山保育園園長）
 研修委員会 谷本 紗恵（砧保育園副園長）

中村 輝（貝取学童クラブ主任）
 渡辺 阿紀奈（向山保育園園長）

中本向山保育園園長（以下中本）：本日はお忙しいところありがとうございます。今回は法人研修委員会で中堅層研修を担当されている3名の皆さんに、中堅層研修についてのお話を伺いたいと思います。

まずは各施設中堅と呼ばれる層について教えてください。

谷本砧保育園副園長（以下谷本）：砧は全体的に職員の年齢層が若く、一番上の職員でも40代です。7～8年目の職員が中堅に当たり、基本的にはクラスの責任者を担っていますが、年上の職員、若い職員の間で挟まれてどのように声を掛けたら良いか悩むこともあるようです。でも昨年の中堅層研修での平松先生のお話を聞いて「自分たちの役割」を中堅の職員たちがよく考えてくれるようになりました。園の職員たちがそれぞれ何に悩んでいるのかを把握して運営側に伝えてくれるので大変ありがたい存在になっています。また園長が中堅



谷本副園長

職員とのコミュニケーションを意識的に取ってくれており、悩みを吐き出せる場を作ってくれているので助かっています。

中村貝取学童クラブ主任（以下中村）：学童クラブは基本的には正職員が4名、うち1名が施設長の構成で主任がいる施設もあります。有期契約職員が各施設2名から10名程度いるため、中堅職員は職員間のパイプ役となっています。施設長とやり取りしながら育成を行っています。学童は正職員の人数が少ないため全員で話し合う機会も多くあり、保育園と比べると施設長との距離はどの職員でも近いかと思います。

渡辺向山保育園副園長（以下渡辺）：向山保育園は職員の多くが6年目以上となり、中堅職員となってきました。それらの職員がクラス責任者になっていますが、今年度から就任した職員も数名いるため中堅職員同士で話し合いをし、保育観、各クラスへの伝え方、共有の仕方について意見をすり合わせて中堅層職員みんなで職員集団作りを行っている感じます。

中本：それぞれの施設で全体的な経験層、人数比、役割も少しずつ違っていますが、どの施設でも中堅層の力が非常に大切であることが分かりました。研修委員会の中で話し合いを重ねているかと思いますが、法人の中堅職員研修に求められている事はどんなことだと思いますか？

中村：まずは中堅層の職員同士で悩みを共有した

り意見を出し合ったりしながら、どのような職員集団を作っていくのかを考える場としたいと考えています。こうなってほしいという思いを押し付けにならないようにどう伝えていくかを考え、悩んでいるのはひとりではないということが中堅層職員に伝わる研修にしたいです。

谷本：自分が運営側に立つようになって、中堅の職員と共に頑張りたいとより強く感じるようになってきました。中堅の職員の大切さを実感しています。現場と運営を繋ぐのが中堅の大きな役割だと思います。運営が現場に歩み寄ることはもちろん大切ですが、間に立って繋いでくれる中堅職員の存在は不可欠です。多摩福祉会ほどの施設でも職員同士の繋がりを大切にしている法人なので、それを実感できるような研修にしたいと考えています。

渡辺：間に挟まれる立場の中堅職員には新人ともベテランとも違う悩みがあります。その悩みは現場ではなかなか共有できませんが、研修の場で共有することで次も頑張ろうと活力を得るような研修にしたいです。昨年の感想に「自分は中堅職員であり、法人の中にも同じ立場の人がたくさんいるのだと感じた。」「現場に持ち帰って活かそう、頑張ろうと思った」との感想がありました。今回



中村主任

もそういった研修にしたいと思っています。
谷本：確かに昨年の中堅層研修の感想には「ひとりじゃないのだと分かり安心した。心強かった」というものが多くありました。そう思ってもらえたのは大変嬉しかったです。今後そのような研修にしていきたいと考えています。

中村：悩みを共有することはどの職員にも必要なことですが、特に中堅職員は難しいと感じています。中堅職員同士、相手の想いを引き出しながら聞いていく事が必要だと感じています。平日頃からどのように子どもたちに還元していくかを考えることが大切ですが、中堅職員も煮詰まってしまうことはあります。子どもたちには時間・空間・仲間の3つが大切と言われますが大人も一緒だと思います。ひとりで抱えなくて良いのだ、仲間がいるのだと思える場所になったら良いですね。

中本：悩みを共有してひとりじゃないと思えたというのは大変大きな成果ですね。では研修を作る上で困難だと感じている部分はありませんか？
中村：講師をどうするかについては悩みますね。渡辺：外部で探そうとしても思い当たる方がいなかったり、また、経験談を聞きたいとの声もあり内部のほうがいいのかと考えたりもします。でも内部の方が忙しいのは分かっているので依頼するのも躊躇しますね。

中本：忙しいかなと気を遣いますよね。分かります（笑）

研修委員会の中でも話し合いを重ねていく上でどんどんブラッシュアップされていることが分かりました。確実に前に進んでいますね。良い研修になりそうで楽しみです。では今後、どのような研修をしたいですか、またはどのような研修が求められると思いますか？

中村：この法人の研修の体系は、ビジョンがあつて進むというよりも現在の悩みや想いを共有してそこから何を学ぶかという進み方かと思えます。合研も実践を通じて深めていく形を重ねていきます。明確なテーマがあるわけではないですが、それは職員ひとりひとりの悩みに寄り添って大切に行っていることでもあると思っています。



渡辺 副園長

谷本：中堅職員はこうあるべきというマニュアルを作るのではなく、大事にしたい土台だけはみんなで共有して、あとは自分たちがどうしたいかを施設や悩みに合わせて主体的に動ける形にしたいと思っています。答えを出すというよりはこういう考え方を持てたら良いよねということと共有したくて研修しています。絶対にこうあるべきだ、中堅は架け橋なのかという文言を伝えるのではなく、「なぜ大事なのか」を考え合いながらひとりひとりの答えを大事にしていきたいと考えています。

中本：子どもたちもそうですが職員集団でも同じ。一人一人の意見が違ってても良いですよ。誰かに正解を求めるのではなく、自分たちで導き出すというのが素晴らしいですね。渡辺さんは今年から研修委員に加わりましたがどうですか？

渡辺：法人全体でやっているというのが大事なことで感じています。今年はコロナも明けたので対面して対話すること、同じ空気感の中でその人を知る交流を大切にしています。自分が初めて法人合研に参加した際に「同じ法人の人がこんなにいるのだ」と実感した気持ちが残っているのだ、一緒に学びあう仲間たちという感覚、交流が大切だと感じています。

中本：研修委員のみなさんが悩みながらも素晴らしい研修を作っていることがよく分かる対談でした。みなさんの力も法人の力もついてきていることを実感しました。次の研修が楽しみです。本日はありがとうございました。今後とも素敵な研修を計画してください。



中本 園長



しろくま保育園

2頭目

ができるまで

2024年4月 練馬区にオープン予定のしろくま保育園。開園に向けてさまざまな準備が進んでいます。開園までの道のりをお知らせします。今回は7月～11月の様子です。

7月 園舎建設予定地で地鎮祭が行われました。

当日の朝は曇っていましたが地鎮祭が始まる直前に晴れて、天気にも恵まれた日になりました。当法人役員と職員のほか、(株)守谷商会、(株)象地域設計など多くの関係者様たちが参加をしてくださって工事の安全祈願が行われました。



8月 基礎工事が始まりました。

園舎建設部分にセメントが入り、足場を組みました。不安定な天候が続き工事の進行が心配されましたが、安全第一で進めていきました。



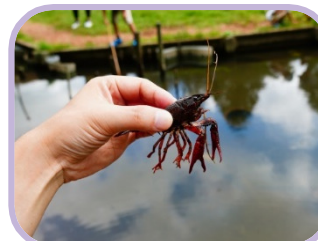
9月 第1回職員研修を行い、建設地周辺・石神井公園を探索しました。

石神井公園ではアメリカザリガニを駆除する団体の方々に会い、ザリガニ釣りをさせていただきました。しろくま保育園の子どもたちとも来たいねと盛り上がりました！午後は向山保育園で保育実践交流やしろくま保育園の保育内容を考え合いました。新しい保育園での保育を言葉にして期待いっぱいになりました。



10月 第1回目の「しろくまひろば」を開催しました。

雨風が強く寒い中でしたが、多くの方にお越しいただきました。子どもたちは人見知りをしたり緊張したりして始まりましたが、次第に慣れていき保護者の方と職員と一緒におもちゃで遊んだり、パズルをしたりして楽しそうに過ごしてくれました。保護者の方たちからは、園に関する質問やお子さんについてのお話を伺い、子育てのことを一緒に考えることができました。最後に、栄養士が朝手作りした「さつまいもまんじゅう」を食べて、和気あいあいとした雰囲気であっという間に時間が過ぎてしまいました。



11月 上棟式を行いました。

秋晴れの中、建設に関わっている方たちや地域の方たち、当法人の保育園の子どもたちも遠路はるばるきてくれて、和気あいあいとした雰囲気でお餅撒きを行うことができました。お餅撒きならぬお菓子撒きでは、2階から撒かれたお菓子を袋をいっぱい広げてもらう子どももいれば、下に落ちたお菓子を無我夢中で拾う子どももいました。「お菓子いつ食べていい？」と先生に質問し、満足そうな笑顔で帰って行きました。竣工まであと3か月ほどとなりました。完成が待ち遠しいです！

